

右舷灯



一般市民にとって最も身近な船と言えば、公園のボート、渡し船、そして遊覧船であろう。幼い時代を港町空蘭で育ったので、遊覧船にはよく乗せてもらった。白鳥湾とも呼ばれる空蘭港の中には、休日には遊覧船がたくさん走っていた。いつもは沖合に停泊する大型船の船員さんの送り迎えをする通船が休日だけ遊覧船に衣替えしていたのだと思う。一番よく乗ったのは、空蘭

の裏手の岸壁から、港口の黒島の手前にある水族館までの遊覧船だった。途中大きな貨物の横を通ると、外国人の船員さんが手を振ってくれたり、父が船尾の船籍港を見て「この船はノルウェーの船だな」などと解説をしてくれたりした。しか

し、今は、こうした遊覧船は空蘭港からは姿を消した。遊覧船は、大別すると港巡り遊覧、海岸の景勝地遊覧、湖の遊覧の3つになる。国交省の統計によれば、遊覧船等の旅客定期航路事業は、2019年時点

筆者が事務局長を務める日本クルーズ&フェリー学会では、日本のあらゆる客船のデータブックを編纂しており、これまでに、高速旅客船、クルーズ客船と中・長距離航路船、近距離航路客船の3冊を発行したが、4

点で1252航路、1131隻、575事業者であり、この15年ほどは漸増して着実な成長傾向

を有している。利用客数は2019年度に940万人で、最も少ない2011年の720万人をボトムにして増加に転じている。多くの離島航路等と同じく

クルーズ客船のデータブックを編纂しており、これまでに、高速旅客船、クルーズ客船と中・長距離航路船、近距離航路客船の3冊を発行したが、4冊目ではいよいよレストラン船と遊覧船の一番となる。というわけで、この夏から全国の遊覧船の調査を始めた。

各地の遊覧船

を有している。利用客数は2019年度に940万人で、最も少ない2011年の720万人をボトムにして増加に転じている。多くの離島航路等と同じく

クルーズ客船のデータブックを編纂しており、これまでに、高速旅客船、クルーズ客船と中・長距離航路船、近距離航路客船の3冊を発行したが、4冊目ではいよいよレストラン船と遊覧船の一番となる。というわけで、この夏から全国の遊覧船の調査を始めた。

8月には、小樽を出発して、北海道、東北、関東、甲信越から大阪まで、列島を縦断して、港や湖の遊覧船を見て回った。多くの遊覧船がコロナ禍によって疲弊しており、中には廃業に追い込まれた船もあった。これらのウィズ・コロナ時代に向けての立て直しのために、船は公的に建造し、運航には民間が知恵を絞るといったシステムが必ずしも必要かもしれない。(池田良穗)